

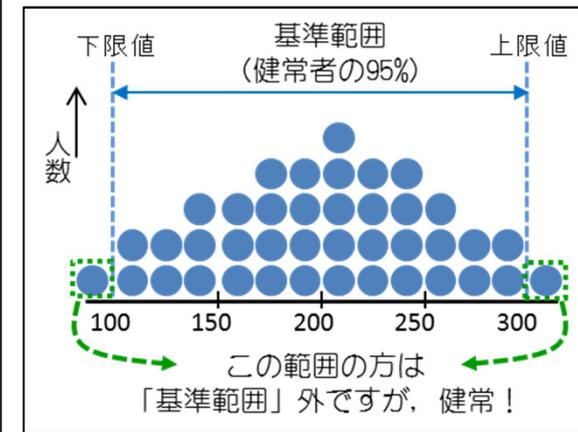
## 検査の基準範囲について

検査結果の横に記載されている「L」または「H」の刻印を見て、「えっ!」「やっぱり・・・」と心の叫びを放ったことありませんか? あるいは、すべての項目が範囲内にあって「ああ、良かった。」と思ったことがありますよね。今回は、その基準範囲について解説します。



### ■基準範囲とは

厳密な条件のもとで健康な成人の検査値を多数集めて検査を実施します。横軸を検査値として、集めたデータ数を縦軸にグラフ化すると右図のように分布します。基準範囲とは、測定値分布の中央95%の区間のことであり、測定値を解釈する際の目安となる値となります。ここで注目すべきことは、1,000人のデータを集めたとしても低値であった25人と高値であった25人は、健常者であるにもかかわらず統計処理によって基準範囲外となることです。基準範囲は、試薬メーカーの推奨や、施設独自で検討したものを使用している場合、他の施設の基準値と比較すると若干の差が生じることがあります。



### ■共用基準範囲

国内のどこの施設でも共有できる基準範囲の作成を目指して、大規模な基準範囲の共同調査が相次いで始まりました。中でも、国際臨床化学連合アジア地域調査、日本臨床衛生検査技師会、福岡5病院会の3つの団体が行った調査は、健常者の選別基準がほぼ同じ条件で、測定値の正確さが検証されていました。その結果、3団体の調査のデータは統合が可能と判断され、測定方法に関して標準化が達成された検査項目について、日本国内で共通して利用可能な基準範囲の設定がスタートしました。この事業は、日本臨床検査標準化協議会(JCCLS)が中心となって推進し、対象が全国(北海道から沖縄県)の健常者で構成され、統計的に地域差がなく国内で統一された基準範囲を使用できることが証明され、JCCLS共用基準範囲と名付けられ2014年に公開されました。

現在JCCLS共用基準範囲は、国内の多くの施設で採用されており、奈良県内でも奈良医大、西和医療センター、奈良県総合医療センター、天理よろづ相談所病院、大和高田市立病院などが採用しています。当院でも過去10年間のデータを解析して十分に検討した上で、以下に示す29の検査項目について、平成30年6月1日よりJCCLS共用基準値を用いることにしました。

赤血球数、ヘマトクリット、ヘモグロビン、白血球数、血小板数、平均赤血球容積 (MCV)、平均赤血球血色素量 (MCH)、平均赤血球血色素濃度 (MCHC)  
総蛋白、アルブミン、A/G比、AST (GOT)、ALT (GPT)、LD、ALP、 $\gamma$ -GT、Ch-E、血清アミラーゼ、総ビリルビン、血糖、尿酸、尿素窒素、クレアチニン、Na、K、Cl、Ca、IP、鉄

#### ■最後に

基準範囲は、検査データを解釈する際の“ものさし”です。検査結果がその範囲の中にあっても、「正常」あるいは「病気ではない」ことが保障されているものではありません。検査値は、運動や食事などの生活環境の変化によって基準範囲から外れることもあります。逆に病気がかくれている場合もあります。



あなたが受け取った検査データがすべて基準範囲内であったとしても、油断は禁物です。この機会に今一度ご自分の生活習慣を見直し、改善すべきところがあれば早目に改善するように努めましょう。

臨床検査に関するお問い合わせは、南館1階25番の中央検査室に直接お越しください。血液検査、尿検査、心電図・超音波・脳波・肺機能など、臨床検査技師が行っている検査全般について『無料』で説明させていただきます。ただし、臨床診断的な説明につきましては、医療法により行うことができません。ご了承とご理解をお願いします。